

よくわかる！医療被ばく—放射線は怖くない？—

Ver.4.4

①放射線検査

1. 放射線検査は病気の発見や治療に必要不可欠です。
2. 放射線を受けることによる不利益が報告されていますが、検査をすることで得られる利益の方が大切です。
3. 当施設では、学会の基準を守り、できる限り少ない放射線で、安全に検査が行えるように工夫しています。日本診療放射線技師会より「医療被ばく低減施設」に認定されています。



②放射線とは

1. 放射線は身体を通り抜ける性質をもっています。放射線検査ではこのことを利用して画像を作成します。
2. 放射線の量のことを「線量」といい、単位をmGy（ミリグレイ）で表します。
3. 放射線による影響として発ガンや不妊などが報告されていますが、受けた線量によって影響は異なります。線量が少なければ受けた放射線の影響が身体に残ることもありません。そのため、繰り返し検査を受けたとしても、放射線を蓄積して考える必要はありません。線量と身体への影響の関係として、次のようなレベル分けがされています。

レベル1
(~50mGy)

ほとんどの組織・臓器において問題となる身体的影響が発生することはないと予想されます。多くの検査が該当します。

レベル2
(50mGy~200mGy)

100mGy以上で胎児への影響を考慮します。その他の影響はないと予想されます。

レベル3
(200mGy~)

線量によっては、身体的影響の出現に注意する必要があります。個人差が大きいので、ご心配な方は相談ください。

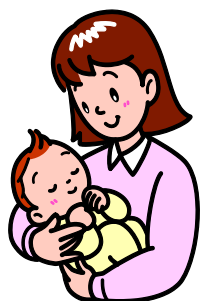
出典：医療被ばく説明マニュアル（日本放射線公衆安全学会 著）

当院では検査ごとに標準体型の被ばく線量を把握しています（詳細は裏面をご覧ください）。

③身近な放射線の例

私たちは常に微量の放射線を受けながら生活しています。

- ・日常生活で自然に受ける放射線（1年間）：2.4mGy
- ・飛行機搭乗による被ばく（東京-ニューヨーク間往復）：0.2mGy



④妊娠中の被ばく

*国際放射線防護委員会 1999年

妊娠中に被ばくをしても100mGy未満の胎児線量であれば安全が確立されており、妊娠中絶の理由にはならないとされています。胎児の被ばくであっても線量が少なければ心配ないことが国際機関によって明記されています。